

肉用牛繁殖経営の定着化に関する調査研究

第1報 阿武隈山系地域における肉用牛繁殖経営の実態とその動向について

阿 部 和 生 夫

(福島県畜産試験場沼尻支場)

Research on the Establishment of Breeding Cattle

1. Actual circumstances and trends of breeding cattle in Abukuma Mountainous Area

Wakio ABE

(Numajiri Branch, Fukushima Prefectural Animal Husbandry Experiment Station)

1 はじめに

阿武隈山系地域は南は東白川郡の矢祭町に端を発し北上し、相馬市の一部にまで及び南北に伸びた丘陵地帯にして県土総面積の約4分の1に達している。

昭和61年度の粗生産額からみた肉用牛特化系数² 以上市町村は県内90市町村のうち15市町村であるが、その大部分は阿武隈山系地域に偏し、なかでも北部の飯館村、中部の都路村、南部の鮫川村は繁殖肉用牛の主要地帯となっている。しかし、最近における子とりめすの動向(福島農村水産統計年報)をみると飯館村でやや増加しているものの、他の二村では横ばい又は減少傾向を示している。そこで、今後における山系地域での肉用牛繁殖経営の定着化要因をさぐるため三村の協力を得て飼養規模別に、土地、労力、経営技術などについて調査を実施し、その実態と動向を把握した。

2 調査方法と対象

(1)調査方法、アンケート調査

(2)調査実施時期、昭和63年1月(実績については62年)

(3)調査対象

1)調査対象村、飯館村、都路村、鮫川村

2)調査対象農家、繁殖肉用牛飼養農家で頭数規模別に各村60.2.1現在調査をもとに、規模別割合で全体戸数の30%以上になるよう調査(回収全戸数758戸(回収率48.0%))

3 調査村の概況

(1)調査村の就業状況及び土地条件: 総就業者数をみると飯館村4,491人、都路村2,083人、鮫川村3,016人で農業就業者率は51.1%, 49.3%, 44.0%となっており、1戸当たり農用地面積は1.94ha, 1.8ha, 2.18haである。また、林野率は75.1%, 81.7%, 72.9%となっている(就業者数総理府国勢調査60年農地面積は61年)。

(2)農業粗生産額: 昭和61年の村別生産農業所得をみると飯館村4,945百万円、都路村2,124百万円、鮫川村2,093百万円で肉用牛を個別農産物生産額順位でみるとい

ずれもその村の5位以内にあり、順位、粗生産額構成比では飯館村3位 11%, 都路村3位 8.7%, 鮫川村2位 11.9%となっている。また、この5位以内で三村での共通作目は米、葉タバコである。

(3)繁殖肉用牛飼養状況の推移: 昭和59~62年(福島農林水産統計年報)の子とりめす頭数をみると飯館村では1,500頭から徐々に上向き3,000頭近くになっている。都路村では800頭前後で横ばい、鮫川村では1,500頭からわずかながら減少傾向を示し62年では1,270頭となっている。

4 調査結果

(1)1~2頭規模で戸数全体の60%を上回り、頭数では30%程度となっている(表1)。

(2)したがって農業収入の副として、又は堆きゅう把生産を主体に飼養している農家が全体の半数を上回っている。

(3)頭数規模が大きくなるにしたがって耕作作目が単純化の方向にあるが1戸当たりの平均水田面積は大きくなる傾向を示している。

(4)農業専従者は頭数規模には関係なく1戸平均2~3人となっている。農業専従者の農外労働日数では飯館村、都路村では1戸1人平均多くとも100日を下回っているが、鮫川村では、特に3頭規模で平均165日、次いで1頭規模平均150日となっている。しかし、頭数規模が大きくなるにしたがって減少傾向を示している。

(5)成牛1頭当たりの平均飼料作付、放牧地等の保有面積では1頭規模で飯館村135.8a, 都路村126.4a, 鮫川村99.2aとなっており頭数規模が大きくなるにしたがって少なくなっている。

(6)年間を通し粗飼料(牧草、飼料作物)が十分まかなわれている戸数は1~2頭規模で70%程度、地域によっては60%となっている。

(7)粗飼料(牧草、飼料作物)の不足分は自家産稲わらを主体にまかなわれており、頭数規模が小さいほどその割合は高くなっている。

(8)サイレーズを給与しているものと、していないものと割合はほぼ半々となっており、給与している農家では頭数規模が大きくなるにしたがってその割合が高くなっている。

表1 頭数規模別飼養状況(成牛)

村名	区分	頭数規模	1頭	2	3	4	5	6-10	11-15	16-	計
飯館村		戸数(戸)	29 (15.9)	45 (24.7)	28 (15.4)	26 (14.3)	20 (10.9)	28 (15.3)	3 (1.7)	3 (1.7)	182 (100.0)
		頭数(頭)	29 (4.1)	90 (12.6)	84 (11.8)	104 (14.0)	100 (14.0)	207 (29.1)	39 (5.5)	59 (8.3)	712 (100.0)
都路村		戸数(戸)	54 (29.8)	55 (30.4)	30 (16.6)	21 (11.6)	8 (4.4)	9 (4.9)	3 (1.6)	1 (0.7)	181 (100.0)
		頭数(頭)	54 (10.9)	110 (22.3)	90 (18.2)	84 (17.0)	40 (8.1)	59 (11.9)	41 (8.3)	16 (3.3)	494 (100.0)
鮫川村		戸数(戸)	161 (40.7)	130 (32.9)	54 (13.6)	18 (4.5)	11 (2.8)	14 (3.5)	3 (0.7)	4 (1.3)	395 (100.0)
		頭数(頭)	161 (16.9)	260 (27.3)	162 (17.0)	72 (7.5)	55 (5.8)	107 (11.2)	37 (3.9)	97 (10.4)	951 (100.0)
合計		戸数(戸)	244 (32.2)	230 (30.3)	112 (14.8)	65 (8.6)	39 (5.1)	51 (6.7)	9 (1.2)	8 (1.1)	758 (100.0)
		頭数(頭)	244 (11.3)	460 (21.3)	336 (15.6)	260 (12.0)	195 (9.0)	373 (17.3)	117 (5.4)	172 (8.1)	2,157 (100.0)

注. 飼養戸数回収率 60.2.1 現在戸数基準に63.1 現在で回収

$$\text{飯館村} \frac{182}{730} \times 100 \div 25\% \quad \text{都路村} \frac{181}{285} \times 100 = 63.5\% \quad \text{鮫川村} \frac{395}{544} \times 100 = 72.6\%$$

る。また、サイレージの種類はトウモロコシが90%近くを占めている。

(9)公共育成牧場の利用農家はほんのわずかであり、利用しない理由の第1は頭数が少なく粗飼料は自家産で十分まにあっている(35.9%)。したがって頭数規模が大きくなるにしたがってその割合は低くなる傾向を示している。

(10)1頭当たり平均分娩間隔は12か月以内では11~15頭階層以上で上回る傾向を示している。また、15か月以上では頭数規模が大きくなるにしたがってその割合は減少傾向を示し、11~15頭規模階層以上ではみられなくなっている(図1)。

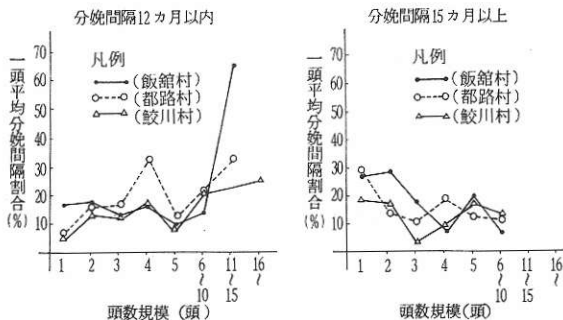


図1 頭数規模別による1頭平均分娩間隔割合

(11)分娩間隔が長くなっている理由としては、発情がよく

わからないが全体で34.2%と第1にあげられ、頭数規模が大きくなるにしたがってその割合は低くなる傾向にある。

(12)子牛1頭当たりの平均生産費は労働費を含めない現金支出のみの経費でみると20万円以内でおさまっている農家が80%を上回っている。

(13)今後、増頭を希望している農家は調査戸数全体の3分の1程度であるが、頭数規模の大小には関係なく増頭意欲がみられる。また、その増頭数は現状規模プラス1~2頭と3~4頭で全体の70%を上回っている。増頭方法は自家産プラス導入が約半分を占め、その資金対応は制度資金を希望するものが一番多く、次いで自己資金となっている。

(14)繁殖肥育の一貫経営を考えている農家は調査農家全体の4分の1を占めており、頭数規模の大きい農家でその傾向が高くなっている。肥育素牛の確保は自家産プラス家畜市場よりの導入が約半数を占め、次いで自家産となっている。

5 おわりに

規模階層別で多少の差がみられるものの、山系地域における肉用牛繁殖経営は稲作を中心とした複合経営が大部分を占め、他作目としては葉タバコ、養蚕、野菜などがあげられる。頭数動向については現状維持、規模拡大など種々であるが、今回の調査を参考にしながら、今後山系地域での定着要因をさぐってゆきたい。